

史劇大楠公



特242
878

7
4

3
3



始



特242
878



額田

六福作

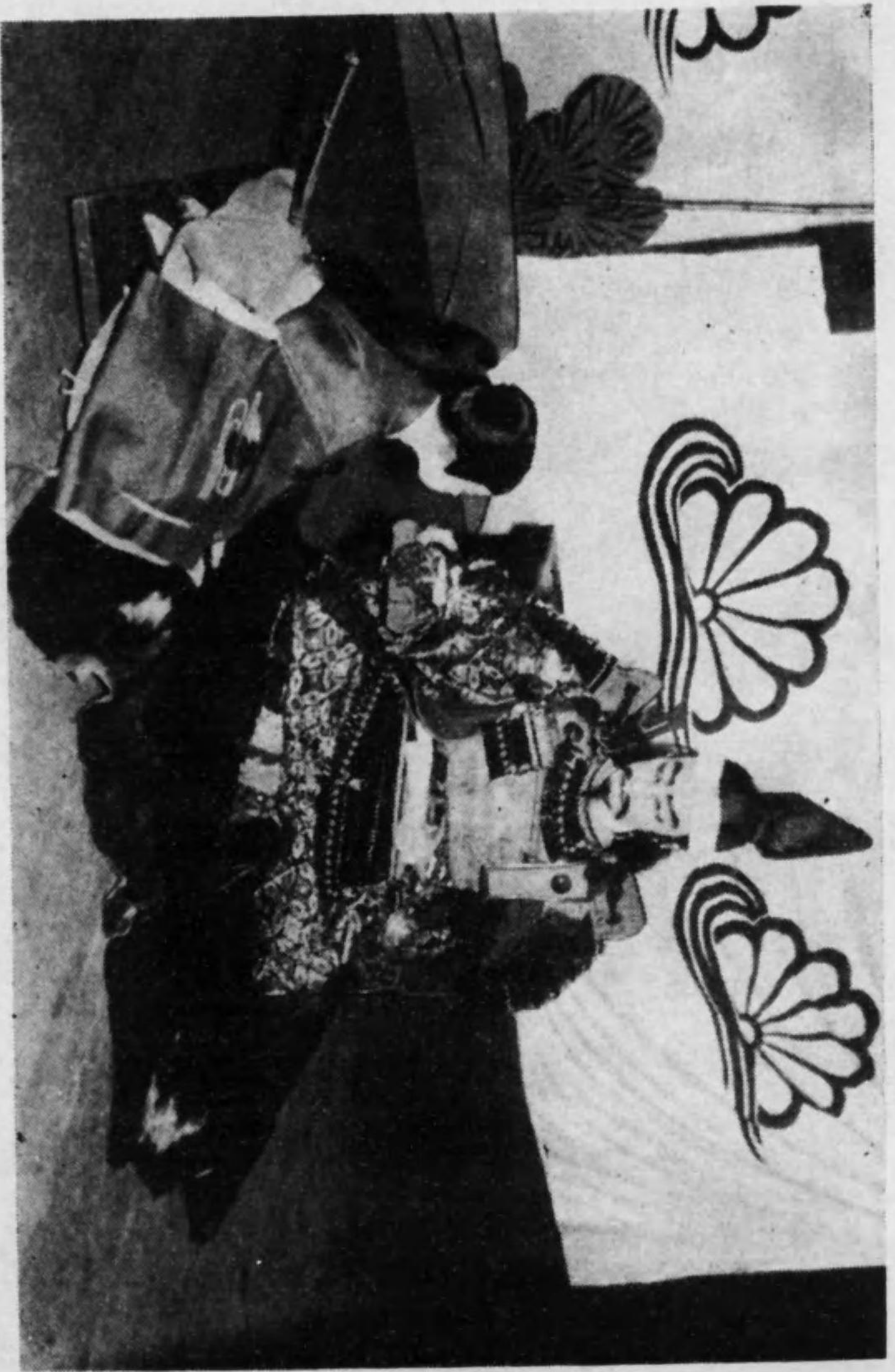
天楠公

一幕三場



◇日本藝道聯盟趣旨

世に藝術ほど人を動かすものはありません。人生の深刻嚴肅なるものに觸れて、能く風を移し俗を易へることは實に藝術の本領でありまして、その爲に日本人は古來之を藝術と謂ふより藝道と稱して尊んで参りました。斯の藝道を振興し之に由つて日本精神の粹を民衆に紹介することは、行詰れる現代に最も愉快な救済福音ではありますまいか。是れ私共が敢て本聯盟を提唱して微力を盡さうとする所以であります。



大楠公に扮せしる市川三升

| | | | | | | | | |
|-----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 志貴 | 吉尾 | 同弟 | 八尾 | 菊地 | 同 | 同弟 | 同子息 | 楠判官 |
| 右衛門 | 三郎 | 武顯 | 別當 | 七郎 | 正季 | 正氏 | 正行 | 正成 |
| 門 | 助定 | | 顯考 | 武吉 | | | | |

配

役

| | | | | | | | | |
|----|----|----|-----|------|-----|-----|-----|----|
| 尾上 | 坂東 | 市川 | 市川 | 市川 | 中村 | 市川 | 大谷 | 市川 |
| 新七 | 薪藏 | 猿藏 | 介十郎 | 團右衛門 | もしほ | 新之助 | 廣太郎 | 三升 |

足利直義
 軍使 須賀壹岐守
 足利方 小寺
 同 小達
 里の 子
 同
 同
 楠 方
 足利方

尾上菊次
 市川鯉三郎
 市川瀧三郎
 坂東重藏
 中村時雄
 中村蝶吉
 中村時之助
 大勢
 大勢

人物

楠木正成 (四十三歳)
 息 正行 (十二歳)
 弟 正氏 (三十三歳)
 同 正季 (三十歳)
 八尾別當顯考 (六十歳、僧形)
 竹童丸 (十七歳)
 志貴右衛門 (三十歳位)
 菊池七郎武吉 (三十四五歳)
 他に官軍の兵士大ぜい
 足利直義

その家來、小寺藤兵衛
同 小達六郎右衛門
外に軍兵
里の童 七八人

場面

- (一) 櫻井宿
- (二) 兵庫、會下山下海岸
- (三) 湊川在民家

第一場 櫻井宿

櫻井宿。平舞臺、中央に松の古木。左右所々に松の立木。その間を縫うて菊水の紋を打つたる陣幕を張る。左右ほどよき處を絞つて出入口とする。古松の下には桶板敷を敷きて、正成の座を置く。その前に少しく間を置いて、正行の座を置く。幕の後は遠く攝津の山々。延元元年五月廿四日の夕暮。幕明くと、下手から七八歳位の里の子供等七八人、手ん手に竹切、木切等をもつて打ち合ひながら出て、やゝしばらく戦ふ。やがて細打ちになる頃、上手より、正氏、正季の兩人いで止める。いづれも烏帽子、鎧。

正氏 (やさしく) これこれ、こゝは大將の御座所だ。こんな處で騒いではな

らぬ。

子供一 (素直に) はい。あまり戦が激しくなつたので、知らぬ間に來て仕舞

ひました。堪忍して下さいませ。

正季 (頭を撫で) むゝ。仲々行儀がいゝな。お前が大將か。

子供一 はい。官軍の大將です。

正氏 ほう。お前が官軍の大將か。偉いなあ。

子供二 違ふ。違ひます。官軍の大將は私です。

正季 ハ、ハ、ハ。お前も官軍か。しかし、さうすると同志討でよくないなあ。

子供一 いゝえ、あつは賊です。

子供二 何を云ふんだ。お前こそ賊だ。

子供一 何にッ。

子供二 何にッ。

と、又掴み合ひかける。

正氏 (とめて)

よしよし、判つた々々々。お前達はみんな官軍ぢや。だが、この小父さんの云ふ様に味方同志で戦をしてはみつともない。仲よくして家へ歸るがよい。もう日が暮れる。母御も待つてゐようぞ。

子供一 有難うござります。では仲よくします。

子供二 む。さうして、向ふ山にゐる悪い山犬を退治にゆかう。お侍様。

さ様なら。

正季 早く大人になつて、本當の官軍になれよ。

一同下手へ去る。二人は見送つて思はず微笑。

正氏 可愛いぢやないか。どつちも官軍だつて……。

正季 子供の言葉は神様の言葉と同じです。賊だと云はれた時の、あのもう一人の子の真劍の怒り様つたらありませんでしたな。

正氏 官軍でゐたい。賊になりたくないと言ふのは、人間の生れながらの心と見える。それが、大人になるにつれて、いろいろな利慾に目がくらんで來るのだ。しかし、賊となつて、どんなに榮耀榮華を盡してゐても心の底には、あの子供の時の良心が残つてゐて、日夜人知れず苦しむでゐるに違ひあるまい。

正季 それに比べると、我々の様に子供の時の心をそのまゝ持ちつゞけて大きくなれた者は、貧しくても幸福ですな。

正氏 さうだとも。しかし、それも皆正成兄上の御教訓の賜物だ。私達はいゝ

兄上をもつて幸福だつたな。

正季　そして、いゝ弟をもつたと兄上に云はれて死に度いものですな。

正氏　今にその日が来るよ。(と上手を見て)

それにしても兄上は少しおそい様だな。

正季　待つてゐるからさう思ふのです。正行もほどなく来るでせう。

と、二人下手奥へ去る。と、琵琶の曲。

さる程に、楠木河内守正成は、逆從尊氏追討の命を受け、六千餘騎を引卒し、青葉茂れる夕まぐれ、櫻井の宿に着きたまふ。

法螺貝の音。上手より、「非理法權天」の旗を五月の風になびかせて、楠木正成が出る。つゞいて家來、志貴右衛門その他の兵が弓、長巻をもつて従ふ。下手から先刻の正氏正季の二人及び、兵數人が出迎へる。

正氏　兄上御着きなされませ。

正季　今宵は茅野泊の豫定なれど、正行も程なう參る頃と存じ、とにかくこゝへ陣をとらせました。

正成　それはよく氣をつけて貰つて有難う。正成はよい弟をもつて仕合せぢや。

正氏　よい弟共と云つていたゞきたうございますな。ハ、ハ、ハ。(正季と顔合せて微笑)

正成　それは濟まなかつたな。しかし、正成は全く幸福に生れてゐる。上御

一人には山の様な御信任を忝うしてゐるし、こんないい弟達や、忠義で勇敢な家來達を澤山もつてゐる。

右衛門　それによいお子様を六人までお持ちです。

正成 (首肯) よい子供は家の寶、國の寶ぢや。まだ幾人の子供があつてもよいと思つてゐる。しかし、正行はまだやうやう十二歳ぢや。ゆく末どうなるか案じられてならぬ。

右衛門 何んその様な事がござりませう。梅檀は二葉より香しと申します。今でも君の御名代として、立派に千早の城を守つておいでになります。

正成 それは八尾の別當や、お前達の身内の者がよく守をしてくれる故ぢや。

(と氣をかへて) しかし、もうやがて來さうなものぢやが……

右衛門 私が物見をして参りませう。

と、起ち上る時、下手から轟く様な人馬の足音が聞え、一人の軍兵が走つて來る。

軍兵 申し上げます。

正氏 何事ぢや。

軍兵 いづくの兵かは知らず、凡そ五六百騎、水無瀬の方より淀川をわたつて、この宿を目ざして一散に駆けて参ります。

正季 何、五六百騎の兵が來る。(考へて) 今頃味方に來る者も無いし、さり

とて敵とも思はれぬが、いづれにしても用心が第一ぢや。右衛門は物見をせい。

右衛門 はッ。

下手へ駆去る。琵琶。

敵か味方か何れぞと、心をくばる折からに、志貴右衛門は手をふり足を躍らせて勇みに勇んでかけ戻る。

右衛門 殿、和子ぢや。和子がお出でなされた。

正成 何、正行が来たと……。

右衛門 即ち八尾の別當を初め、六百餘人、一人残らず参りました。

と云ふ中に下手から、正行はじめ、八尾別當顯考走り出る。やゝおくれて雜兵二人正行の鎧櫃を擔ふて出る。

正行 父上、只今参りました。

顯考 正成どの、参りました。

正成 遠路御苦勞でござりました。しかし、今承れば供の者六百餘人と申す事。されば千早に残し置きたる者、残らずでござりませうな。

顯考 (うなづく) これまでの戦と違ひ、今度こそ必死の戦ぢやと聞きま

した。正行も今年十二歳に相成ります。孫子吳子の兵法も残らず誦じまし

た。戰場へお供をして参つても足手まといにはなりません。 (鎧櫃を指して) 鎧もこの通りもたせて参りました。

正成 (首肯いて) それは健氣な心がけぢや。父はとりあへずほめて上げます。しかし、兵庫へは叶はぬ。お前は又これから河内へ歸るのぢや。

〽言葉に正行打ち驚き。

正行 何と仰せられます。では櫻井へ来いとお手紙は、戰場へ召しつれられるのためではなかつたのでござりまするか。

正成 さうぢや。(と一同を見廻して) 手紙にも書いた通り、足利兄弟四國九郷を斬りしたがへて、總勢二百萬の大軍で、海陸二手に分れて、ひた押しに都へ攻め上つてゐる。味方は新田殿の手勢六萬餘騎に、正成が勢七千騎ぢや。いかほどに力を盡しても勝敗は定つてをる。

正行 (思はず膝をのり出して) 違ひます。勝敗は兵数の多寡ではきめられませぬ。それは、兵庫の浦の様な、何の要害もない處ならさうですが、外に手段がないとは申されませぬ。

正成 (微笑して) お前にそれが判るか。

正行 はい。間違うてゐるかも知れませぬが……私なら兵庫へは参りませぬ。

正成 ふむ。(考へて) しかし、あすこで防がぬと、賊は雪崩を打つて都へ亂

入するぞ。さうしたら 天子様はどうなる。

正行 畏れ多い事ですが、この春の様に又叡山へ行幸を奏上します。そして、

新田勢に守護させておいて、我々一族は故郷の河内へ戻ります。

正季 ふむ、何だか好計がある様だが、逃げて歸るのは少し卑怯でもある様だ

な。

正行 今の場合、そんな事は申してをられません。

正氏 それで、どうする。

正行 都へ入つた賊軍は、大方西國勢でございませすから、兵糧はあの淀川を舟

に積んで上すか、この街道を馬で運ぶかするより外はありません。金剛山

からこゝまでは僅か一日道故、不意に打つて出てはその兵糧を悉く奪ひ、

とつて仕舞ひます。さうすれば、都中の敵兵は自然と兵糧せめに逢うて、

いつかの千早の寄手同様、散り散りになつて逃げ歸るに違ひありません。

その隙に、新田・楠木・兩軍一度に攻めかゝれば、賊を亡ぼす事は火を見

るより明かませう。

顯考 (ハタと手を打つて) 殿、あれを聞かせられたか。正氏どの正季どの、

和子を育てたのはわしぢや。自慢させて貰うてもよからうな。

正季 む。叔父ながら恥しい事ぢや。(と正成を見つゝ) しかし我々はとも

かく、兄上にその位の計略が思ひつかれぬ筈はないと思ふ。喃正氏兄上。

正氏 さうぢや。(と正成に) 昨日御所での評定の様子は、本當はどうだったのです。御下問に對して兄上は何と勅答されたのです。

正成 (重く靜かに) 今正行が申した通りぢや。

正行 え。

正成 今となつてそれより策のほどこし様がない。

正氏 それなのに何故勝目の無い戦をしに兵庫へ向ふのです。誰が兄上の建策を妨げたのです。

正成 その人の名を擧げるのはよくない事だが、云はねばお前達が得心すまい。坊門宰相清忠卿ぢや。

正季 そ、その青公卿は何と云ふんです。

正成 今年の二月にも叡山へ行幸になつたのに、又候そんな事があつては、帝威が薄く思はれる。殊に、まだ一戦もせぬ前に都をすてるとは、もつての外ぢや。これまでも官軍は小勢でもつてしばしば大敵を破つた事がある。今度とても陛下の大稜威でキツト勝つ事が出来る……とさう云はれるのぢや。お上にはその議をお取上げになつて、即座に兵庫下向の命令が下されたのぢや。

正行 でも……でも、將軍閣外にあれば、主命と云へども奉じない事があると申します。今から河内へ戻られても、決して不忠とはなりません。

正氏 さうだ々々。是非さうなされい。だれか一人兵庫へ行かなければならぬなら、私をやつて下さい。楠木判官正成と名乗つて立派に打死してみせま

す。

正季 私もやつて下さい。

正成 (涙をはちいて) 有難う。今に初めぬお前達の志、正成は全くいゝ弟をもつて仕合せぢや。しかし、兵庫へはやはり正成が下るべきぢや。

顯考 でも、みすみす勝てぬ戦と知りながら、下向するのは、まるで自害しにゆくと一つではござりませぬか。

正成 (うなづく) その通りぢや。正成は死に場所をかしこに求めてゆくのぢや。(と一同を見廻はしてキツト) と、云ふたばかりでは判るまい。わしは、この頃つくづくと今の世の有様を思ひめぐらしてみた。お前の云ふ通り、今こゝから河内へ戻つても、あながちに不忠ではない。しかし、今さうして足利を亡したとて、今の世の有様では、すぐに又第二の尊氏が生れ

て来る。それを亡ぼせば又その次の賊が現はれやう。それは世の中の人の心がゆるみ、忠孝の道がすたれて仕舞うてゐるからぢや。丁度くさつた魚の腸の様ぢや。

正行

ですから、その腹をすてれば、蛆や蠅もわかなくなるでございませう。

正成

わすか、魚の腸位ならとりすても出来る。焼きすてる事も出来る。し

かし、上は 陛下のお傍につかへる公卿達や、武士達や、下は町人百姓まで、みんなさうだつたらどうする。今こゝで二萬や三萬の賊を斬つてみた處で何のたしにもならぬ。わしの敵は尊氏直義ばかりではない。目に見えぬ、人の心の奥の奥にひそんでゐる悪心ぢや。わしはその悪心と戦ふのぢや。今ばかりではなく、三百年、五百年千年の後々までも、この日本の國があらん限り、わき出してくる、もろもろの邪悪と戦ふのぢや。

正氏 その御心持はよく判りまます。しかし、今兵庫へ行く事が、どうしてその志に添うのですか。

正成 お前にはまだ判らぬのか。たとひ坊門宰相の讒奏にせよ、兵庫に赴くとあるは、勅諭ぢや。いゝか。(力を入れて) いゝか、勅諭なのぢやぞ。勅諭とあれば、たとひ水火の中へでも飛び込んでゆくが正しい日本人の心ぢや。わしは、他に生く可き道を知り乍ら、勅諭の故にいさぎよく……さうぢや、潔く死んだ者のある事を、今の世の人、これから生れて来る何千何百萬の人々の心にしつかりと彫りつけたいのぢや。(正行に) どうぢや、判るか。

正行 (首肯) ですから……ですから、正行も一所に兵庫にお供をしたいのです。親子共々に 天子様のお爲めに死にたうござります。

正成 よく申した。立派な心がけぢや。いづれその日が来るであらう。しかし、それは今日ではない。

正行 では、どうしてもお供は叶ひませぬか。

正成 (うなづく) 正成が討死したら、天下は悉く尊氏のものとなるであらう。畏多い事ながら、お上には都をすてさせられて、再び御還幸の日はあるまい。その時かすかながら。大御心を安め奉る者は、生き残つた楠家の者共より外はあるまい。

正行 はい。

正成 しかし、敵は弓矢ばかりで攻めて来ると思ふな。高い官位、澤山の金銀、又は廣い領地を餌にして、お前を味方につけやうとするかも知れぬ。百萬の弓矢の敵よりも、恐れても恐る可きはこの敵ぢや。球は碎けてもその白

きを更めず、竹は焼けても其節を失はずと云ふ。父の教をよくよく嚙みしめて、必ず忠義を怠るでないぞ。判つたか。

〽理をせめ言葉を盡し、残るくまなき教訓に、正行ハツとひれふして、

正行 恐入りました。そのお言葉を承つて、正行の迷が晴れました。すぐに

河内へ戻ります。そして、お言葉をよく守つて、生き残る家來を養ひそだ

て、再び金剛山に菊水の旗をひるがへしませう。

〽さはさりながらこの年日、慕ひ奉りし父上に、今を限りの別れぞと、思へ

ば引かる後髪

正行 起ちかけて躊躇する。

〽思ひは同じ正成も、十年に餘る二年を、朝な夕なにいつくしみ、育てあげ

たるいとし子と、今を最後の別れぞと、思へば心結ばれて流石に猛き武士も、

そゞろ泪にくれければ、並居る諸士も諸共に、しばらくぬ袖ぞなかりける。

正成 思入。一同泪を拭ふ。やがて正成は懷中より一卷の書を取り出し、

正成 いや、我ながら不覺であつた。もう餘程時がたつた。今宵は茅野泊り故

急がずばなるまい。正行も暮れぬ中に淀川を渡るがよい。これは今日の形

見ぢや。持ち歸つて母にも見せるがよい。

正行 忝うござります。 (と押いたゞいて) これは三略の巻でござりまする

な。

正成 さうぢや。得がたい兵法の書ぢや。父は肌身はなさず持つてゐた。心に

迷が出た時、氣に怠が出たとき、いつもこの書で勵まされ教へられて來

た。これから先きお前も事にあたつて思案にあまつた時、ものゝ判断に迷

うた時は、この書物を開いてみるがよい。

正行 忝うございます。それこそ父上と申うて肌身につけて参ります（と懐

中し）では父上、叔父様方、これでお分れ申します。

正氏 む、達者で暮すのだぞ。

正季 兵士達を可愛がつてやるのだぞ。兵士達はお前の手足だからな。

正成 これは有難い。正季叔父様はよい事を云うて下された。主人ちやと云う

て、決して我意を振舞つてはならぬぞ。（と顯考に）御老體大儀ながら御

願ひ申します。

顯考 （頭をふつて）いや、それは困る。正行どのはともかく、わしは兵庫へ

お供します。

正成 これはしたり、正行でさへきく分けたのに、お前様が何故その様な無理

を仰せられます。私は七千人の兵をつれて來ましたが、それさへ七百人を

残して、あとは正行と一所に河内へかへすつもりでをります。

顯考 ではその七百人の中に加へて貰ひたい。（じつと見て）無理は承知ぢや。

しかし、わしはもう六十を越した。この上幾年いきられるものではない。

せめて最後の御奉公をさして下され。

正成 （うなづき乍らも）御心持はよく判ります。しかし、兵庫で打死するも

のは、正成兄弟その他のもので澤山です。どうぞ生きながらへて、正行や、

その他の小供のために、父ともなり師ともなつてやつていただきたい。正

成、両手をついて御願ひ申す。

天に代つて頼むぞと、いとゐんぎんにありければ

顯考 （ワツと泣き出す）あやまつた。あやまつた。老先き短い身故、戰場へ

すてたいと申したが、その實名聞を望む心がなかつたではない。しかし、

今より心を無にして、ひたすら、正行どのを養育いたします。さ、和子、参らうぞ。

正行 はい。

「さらばと會釋ねんごろに、静々起つて歩みしがさすがに心亂れ來て、ワツとばかりに父の膝、あやめもわかず泣き沈む。

正行立ち去りかけて急に悲しみに襲はれて、正成のそばにかけ戻つてその膝にすがつて泣き沈む。

正成 ハタと斥けて

「え、未練なる正行。今の健氣さはどこへすてたぞ。これよう聞け。獅子は子を生んで三日たてば、千尋の谷底へ投げ落してその強弱を試す。その時、百獸の王たるべき獅子は、中途にてはねかへりて死せずと云

ふ。獸すらかくの如し、いはんや萬物の長たる人間が、獅子に劣つて恥とは思はぬか。

「やさしき父に引きかへて、魔神の如き怒り聲。正行ハツと心づき

正行 恐入りました。あまりの悲しさに前後を忘却いたしました。けれど、も

う泣きはいたしませぬ。正行と云ふ獅子は、必ず中途ではねかへつて、どの様な峻岨な絶壁をもよち上つて、親獅子のところへ戻ります。

正成 その親獅子がぬぬ時は。

正行 もとの洞に戻ります。そして、百獸をしたがへて、世に害をなすもろもろの悪獸毒蛇を食ひ殺します。さらばでござります。

と、悠然と一禮して、見かへりもせず下手へ去る。顯考、その他したがふ。

兵庫、會下山々下の海岸。平舞臺。處々に松林。正面奥は海にて見わたすかぎり兵船で覆はれてゐる。前場の終の貝の音につゞけて、陣鐘の音。遠よせの関の聲。すぐに爽快なる琵琶となる。

へさるほどに、逆賊足利尊氏は、百萬餘騎を引卒し、五月廿五日の月諸共、兵庫の浦に打ちよする。待ち設けたる官軍は、新田義貞の二萬餘騎、楠木正成の七百騎、衆寡論するに足らねども、忠義にこつたる切先は、一人にして千人に當り、十騎にして萬騎を追ひ、あたるを伴薙ぎ立つれば、血汐は流れて河となり、屍は積んで山をなし、さすが名を得し賊兵も、攻めあぐみてぞ見えたりける。

と、これにて左右から、流れ矢數十本射出し、上手から正季、下手から正氏、互に數十人の敵とわたりあひながら出て来る。大奮闘の後、下手へ敵を追ひ込んで仕舞ふ。間。又陣鐘の音。と、上手から、「卑怯者までツ」と呼ばはる聲と諸共に、逃ぐる敵將直義を追うて、正成が猛然と走り出る。早や所々に手傷を負うてゐる。

正成 豊子いづくまで逃ぐるぞ。 勅命によつて楠木判官が向ふたりすみやか

に首をわたして、不忠不義の云ひわけをせい。

直義 云はれたな正成。御身に勅命あれば、この直義は院宣を蒙つてゐるぞ。

正成 だまれ。天に二日なく、地に二王無しちや。おのれまことに不義でなくば、尋常に勝負せい。

直義 云ふにや及ぶ。

と、太刀を抜いて二人激しく斬り結ぶ。直義次第に斬り立てられて已にあやふくなる。ところへ、上の方よりその家來、小寺藤兵衛と、小達六郎の二人が出て来て正成の前に立ち塞る。

藤兵衛 搦手の總大將ともあらうお人が、直きちぎの太刀打は見苦しうござります。

六郎 あとは兩人で引受けました。早々に本陣へ引き上げられい。

直義 む。兩人か。頼んだぞ。

と、そのまゝ下手へ逃げてゆく。

正成 (怒つて) おのれ下郎、妨げするなッ。すぎれ、すぎれッ。

と、忽ち兩人を斬りたふして追うてゆかうとする時、下手から正成正季の兩人が出る。これも已に負傷してゐる。

正氏 お、兄上。

正成 正氏か。もう逢へぬと思つたが、又逢はれたな。

正季 七度わかれて七度逢ひましたな。

正成 もう別るゝ事はあるまい。して、戦の模様は。

正氏 残念ながら總敗軍でござります。義貞殿は西の宮まで落ちのびられました。一旦逃げ散つた賊兵どもは、それに勢を得て、海陸こそつて津浪の様

に押し寄せようとしてをります。

正成 して、正成が手勢はどうぢや。生き残つた者が幾人ある。

正氏 今朝辰の刻から十六度の合戦に、さしもの大軍を散々にかけて惱しました

が、身鐵石ならねば、次第々に打死して、わづかに七十三人となりまし

た。

正成 七十三人。(微笑) 思うたよりも澤山生き残つたな。

正季 これ丈けの人数があれば、十分一方を蹴破つて落ちのびられます。

正成 いや、それは違ふ。櫻井の宿で申した如く、正成は今日この里を最後の

場所と思ひ定めてゐる。今朝からの合戦に、敵も大方我等が手並を知つた

であらう。この上幾人殺しても、無益の殺生ぢや。ただ、心靜かに自害し

ようぞ。(と上手をのび上つて) おゝ、あそこに一軒の民家がある。この

はげしい戦の中にあつて、兵火にも焼かれず矢玉にも壊されず、不思議に
長閑に見える。あれこそ最後の場所にふさはしからうぞ。

とゆきかける。と、下手から、貴志右衛門が一人の足利方の旗持の兵を追うて出て、こ
れを斬りたふして、その旗を奪ふ。

右衛門 (高く捧げて) 搦手の總大將、足利左馬頭直義は、この通り旗をわたし

て楠木判官に降参したぞ。口惜しかつたら攻めよせて奪ひかへして見い。

ハ、ハ、ハ、ハ。

一同 ハ、ハ、ハ、ハ。

と、呵々大笑する。

闇 轉。

第三場 湊川在民家

湊川のほとりなる百姓家。薬ぶきの二重屋體。縁つき。兵火の中にありながら、不思議に何の災もなく、垣根には五月の花など咲き出でゝある。
前場のすぐあと。縁の上に正成、その左右に正氏、正季、その他宗徒の者が静かに太刀鎧をぬぎをる。杜鵑一聲二聲、静かな曲。

杜鵑 あはれ血を吐く思ひかな。されば楠木正成は、思ふがまゝに大敵を打破り、最早やこの世に露ばかり、思ひおくことあらざれば、いざ諸共に死出の旅、いそがんものと夕まぐれ、賤が伏屋に入りたまふ。

皆この間に鎧をとり去る。

正成 (一人ごとの様に) 十一ヶ所まで斬られた。まづこれで誰に死骸を見られども恥しうはあるまい。正氏はどうぢや。

正氏 矢傷を合せて十三ヶ所ござります。

正季 わしはたつた九ヶ所ぢやが、逃げ傷は一ヶ所もないぞ。

正氏 志貴右衛門は十八ヶ所まで手傷を負うたさうぢや。まるで鬼神ぢや。あれの目の前に立つた敵は、災難だつたな。ハ、ハ、ハ。

笑ふ。下手からその志貴右衛門が出る。

右衛門 何を笑はせられる。

正氏 右衛門か。俄かに静かになつた様ぢやが、敵の様子はどうか。

右衛門 先刻の様子では、今にも打ちかゝるかに見えました。今朝からの手並

におちてか、四五丁引き下つて備を立てたきり、誰一人攻めかゝらうとする者もござりませぬ。

正氏 ハ、ハ、ハ。羹にこりて膾をふくとは彼等がことぢや。

正季 死せる孔明生ける仲達を走らすか。あきれ果てた臆かな奴等ぢや。

正成 しかし、それがために心静かに最後が遂げられると云ふ者ぢや。(と下

手を見て) いや、さうでない。あれ見られい。たゞ一騎、馬に白泡をかま

せて駆けてくるぞ。
正季 敵ながら天晴れ勇士ぢや。いで、正季が最後の手並を見せてつか

はさう。(と再び鎧をつけようとする)

正氏 待て々々。何やら打ふつてゐる。軍使ではあるまいか。早るな。

へめんめん油断なき處に、尊氏の家來須賀壹岐守、禮儀正しく入り来る。

壹岐 (敬々しく) これは正成公と御見受け申す。主人尊氏の命によつて、須

賀壹岐守御使にはせ參じ申した。

正成 (禮をかへして) これは御丁寧なる御口上。して、使者の赴は。

壹岐 されば、主人尊氏申しまするに、今朝よりのお働き、世にも目ざましう

存じ申した。さりながら、勝敗も大方決したれば御命を全うして、御歸國

召されいとこの御口上でござります。

正成 何、正成に生きて戻れと云はるゝか。尊氏殿には何のよしみで、正成の

生命を惜まるゝぞ。

壹岐 されば、建武の昔は、共に戰場にくつわを並べし舊友のよしみ忘しがた
く、又今日のお働き。かゝる名將をむざむざかゝる邊土の土となし奉ら
ん事の、惜みてもあまりありと、直義公にも御言葉添へござりました。
正成 何、直義殿よりの口上か。(一同をみて笑ふ) ハ、ハ、ハ。(と形を正し
て) されば、御返事申さう。御親切なる御言上、忝う存じ申す。さりな
がら、正成生きのびんと思はゞ、仰せまでも無く、たとひ何百萬騎にて打
ちかこまるゝとも、吉野紙よりたやすく打ちやぶつてかけ通り申すべし。

壹岐 や……………。

正成 しかし、折角の志故、童一人を御頼み申す。恙うお通し下されい。(と
上を見て) 竹童、竹童。(とよぶ)

竹童 (出る。十七歳。元氣な少年である。手傷一ヶ所あり) お召しでござり

まするか。

正成 お前はいくつになつたな。

竹童 當年十七歳に相成ります。

正成 さうか。それにしては大人も及ばず働いてくれて有難う。手傷はいたむ
か。

竹童 (恥しげに) たつた一ヶ所でござります。しかし、正季様のお言葉の様
に、逃げ傷ではありませぬ。

正成 それは尙偉い。そこで私の頼があるがきいてくれるか。

竹童 はい…………殿様の仰せなら水火の中へでも飛び込みます。

正成 有難う。それではな、この須賀殿と一所に、河内へ戻つてくれ。

竹童 え、何と仰有ります。

正成 この鎧は打死の今まで着た鎧ぢや。お前が着て行つて正行にわたしてくれ、そして今日の戦の様子を、皆に話してやつてくれ。

竹童 はい。よく判りました。しかし、このお使はいやでござります。

正成 何と申すぞ。

竹童 私は二親の無い孤兒でござります。そして物心ついてから、片時もお傍をばなれずに、お前様を父とも母とも思つて慕つて來ました。その御高恩に負き、今の御最後を見すて、どうして歸國出來ませう。どうぞ他の人をやつて下さりませ。そして、私を冥途とやらまで連れて行つて下さりませ。

(と泣く)

正成 (思はず涙をはちて) その志はうれしいが、たゞ戦の様子を知らせにゆくばかりではない。傷養生をしたら、正行に奉公して今一倍の忠義をつ

くして貰ひたいのぢや。他のものはもう年をとつた手傷も重い。お前は手傷も淺く、年も若い。卑怯者と見下げて歸すのではない。なう、判つたか。竹童 判りました。(涙を拭うて) よく判りました。それではすぐに河内へ参ります。

正成 行つてくれるか。千早へついたら、正行はじめ、こゝに居る者の知人どもに、今日の勇ましい戦の様子を詳しく話してくれ。(壹岐守に) 壹岐どの。

御頼み申す。

壹岐 (涙を押へて) 畏りました。須賀壹岐守、生命にかへて送りとどけます。

御免。

と、竹童丸を伴うて下手へ去る。杜鵑一聲又一聲。

正成 (見上げて) 杜鵑ぢやな。

正氏 さうです。我子を探ねて、一日に八千八聲泣きつづけ、遂ひに血を吐くと云ひます。

正成 さう云ふ話ちや喃。(思入。やがて氣をかへて) いや、由ない事を思うて恥しい。(一同を見て) 用意はよいな。

正季 いつでも御供いたします。正氏兄上、わしと刺違へよう。

正氏 よし。(と互に胸に刀をあてる)

正成 まづ待て。人間は最後の一念によつて生を引くと云はれてゐる。この世の中に思ひ残す事は無いか。

正季 ありますとも。私は七度人間に生れ代つて、七度賊を打ちたいと思ひます。

正氏 七生報國か。いゝ言葉だなあ。正成兄上は。

正成 わしは七生は愚か五百生まで生れかはつて朝敵を亡したいと思ふ。まことに愆のふかい願ぢやが、閻魔大王も許されるであらう。ハ、ハ、ハ、ハ。

正成 いすまゐる正一同は皇居遙に伏し拜み

正成 さらば。

腹を切る。正季、正氏刺し違へる。右衛門は自分で首を刎ね切つて死ぬ。

正成 (早目に) こゝに菊池七郎武吉は、兄肥後守の命により、湊川の合戦見聞に來てありしが、官軍不利なりと見るよりも、正成如何にと駈け來る。

武吉 楠木どの……正成どの……(と死骸を見て) おゝ、早や自害めされたか。

御兄弟も一族も皆残らず御供せられたな。(と死骸を引き起して) あゝ、

何と云ふ氣高いお顔ぢや。晴々として苦痛の様なぞ露ほどもない。天晴日

本第一の忠臣にふさはしい御最後ぢや。この尊い御死顔を一目でも見たも

のは、立ちどころに悪心を失ひ、清淨無垢の心となつて、長く御國の守とならう。あまりの御したはしさに、冥途の御供仕る。

と、手早く鎧をぬいで短刀で腹を切つてたふれる。とたんに、下手でドツと賊軍の鬨の聲。

武吉

む。足利方の勝鬨だな。(のび上つて) けだものめ。それは勝ち戦の

祝ひ聲ではないぞ。不忠不義の報ひにて、やがて親は子を殺し、兄は弟を

呪ひ、臣は君を弑して、共た地獄に墮ちて、紅蓮の猛火にやかるゝ阿鼻叫

喚の聲と知らぬか。ハ、ハ、ハ、ハ。

ハ勇々しかりける最後なり。

—幕—

昭和十年六月二十二日印刷
昭和十年六月二十五日發行

(非賣品)

著者 額田六福

東京市麹町區内幸町大阪ビル新館四階
文化聯盟

發行者 安藤 蒸

東京市麹町區内幸町大阪ビル新館六階

發賣所 日本藝道聯盟

東京市麻布區三河臺町二番地

印刷所 秀巧社印刷所

詩吟レコード

吉村岳城吹込

| | | |
|------|---------------------------------|----|
| 河内路上 | （菊池溪琴作） | 一枚 |
| 時事有感 | （安岡正篤作） | 一枚 |
| 偶感 | （西郷南洲作） | 一枚 |
| 亡友 | （同） | 一枚 |
| 警察官 | （一）（安岡正篤作） （二） （三）（村上佛山作） | 一枚 |
| 無題 | （松平春嶽作） | 一枚 |
| 偶成 | | 一枚 |

定價 壹枚 壹圓參拾錢

送料 市内 十五錢
市外及地方 三十錢

發行所

日本藝道聯盟
東京市麹町區内幸町大阪ビル新館
電話銀座一四一六番

吉村岳城著

朗吟詩撰卷上

三五列百五十頁
總ルビ付上布裝
定價金三十五錢

在來の詩集は漢學研究者の爲にといふ立前で作られてあるが、本書は吟ずる人達の爲にといふ立前で作つた（著者自序の一節）もので、收むるところ古今の名詩六十首頼山陽、藤田東湖、橋本左内、西郷南洲、吉田松陰、李白杜甫等、文人墨客、王業維新の英雄、烈士等が心血を吐露した名吟に一々譯文を附し、且つ詩吟の感じを理解出来る様懇切なる解釋を附して居る。本書によつて、難解深奥な漢詩の文意も容易に我々のものとなり、古今の聖賢、風土の志情に親しみ得る様に出来て居る流行歌の代りに詩吟を普及して日本藝道振作の爲盡したいと著者の念願が凝つて本書を爲した。江湖の愛誦を薦む。

朗吟詩撰下巻

近刊

發行所

東京市麹町區大阪ビル二號館
日本藝道聯盟

終